

## 被災地（大船渡市）より・その4

菅原 聡子 shirasagi77@ezweb.ne.jp

現代人は、120人の奴隷に支えられている程、便利な生活をしていると読んだことがある。津波により、何十人かの奴隷さんたちが、お休みに入ってしまった。その為、六日間もシャンプーができなかった。

津波直後は『人命救助優先』で、捜索が中心らしい。一週間後、知事さんが『復興』に切り替わったことを宣言すると、近くの公園に給水車が来て下さるようになった。

それまでの一週間は、水と言えば飲み水のこと。給水車は、ハンディのある私が、普段は途中までバスを使うほどの高台にある。そこへ、車が渋滞しないように歩いて来るようにと放送があった。重いものは持てないし、酸素ボンベの在庫を使ってしまったら、いつ補充できるか分からないので、そんな遠くの高台までは行けない。

取るべき行動として、会う人ごとに『水が無い！水が無い！』と訴えては、誰かが、届けて下さるのをじっと待った。津波直後に、断水を予想して溜めた分と、買い置きのミネラルウォーターもあった。時々届く、2リットルの水の有り難かったこと！嬉しかったこと！一生恩返しをせねば！

こうして一週間の『水＝飲み水』の生活が過ぎた。変電所がすぐ近くにあるため停電は六日間で済んだ。電気が戻ると大家さんの井戸水を使わせて頂けるようになった。お陰で砂漠を横断するように、血眼で「水！水！」と訴える生活が終わった。

遠方より、応援に来られた電気工事会社の方々が、山に残雪の寒さの中、急いで作業をして下さったお陰だ。「もうすぐ、電気が戻ります」と戸別に回られた方に、拍手をして喜びを伝え、感謝の言葉というよりは、おおはしゃぎをしてしまった。

暗くなり始める16時前に夕食を済ませ、布団を敷いておく。暗くなったら、布団に入り眠る。目覚めると23時40分だったりする。猫の規則的な寝息を聞きながら、朝日を待つ。漆黒の闇から解放される喜びと共に、明るくなったら、動き出す生活も終わった。

夜、明るい中をスタスタとトイレに向かえるのは、大勢の方々の発明と、技術のお陰。

井戸端会議は楽しかった。「こんな時だからこそ、助け合いましょう」の精神で、毎日、近所の方々と会話できた。職場を流され、盆や正月のように皆が家にいた。津波から17日目、水道が復旧すると、井戸端会議はなくなり、近所の方々とも会えなくなり寂しかった。

観察すると、断水の間は水汲み(なすべき行動)に追われ必死だったが、水が出るようになった途端、ほっとして、疲れがどつとでて、動けない、何もしたくないという様子を多く見た。なすべきことは、休息に変わったのだ。

水汲みで気づいた。普段、皿洗いのすすぎ、シャンプーのすすぎ、靴下等の小物に限った洗濯のすすぎ。これらのすすぎにどれだけ水を使っていたことか。短い坂道を往復して溜めた水は、あっという間にすすぎに流れて消えた。

給水の設備を考え下さった方、技術者、工事して下さった方、給水の管理者、蛇口を作った方、売って下さった方、パッキンの交換をして下さった方、水道料金を払えるのは、障害年金のお陰、障害年金を頂けるまで行動できたのはCLのお陰。

蛇口をひねる前に「使わせて頂きます」と一礼するようになった。(2012/冬号につづく)



ここも陸前高田市・瓦礫のないきれいな川 6/9 撮影

[➡ 目次へ戻る](#)